

長野市立

博物館だより

第5号

発行 長野市立博物館
発行日 昭和60年3月10日

長野市小島田町八幡原史跡公園内
〒381-22 ☎0262(84)9011



4月7日より “善光寺信仰” 展開催

善光寺如来絵伝

(善光寺堂明坊蔵)

善光寺のできたいきさつは、善光寺縁起と呼ばれ、絵物語りなどで今に伝えられています。

その御本尊は三国一と尊称されるように、7～8世紀までの世界と日本・信濃を舞台に壮大な物語りの構成となっています。

昭和59年度の

展示活動

第8回企画展

仕事着

—変遷と地域性—

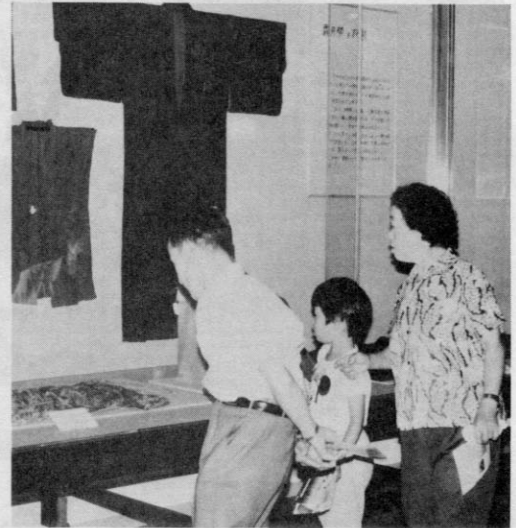
7月15日～8月19日

衣服の世界を歴史的にみると、上層階級の人々が使用した小袖・振袖などのきらびやかな着物やハレの衣装は現在まで良く残っているのに対し、私たち庶民の生産にかかわる衣類は近年のものでもほとんど保存されていないことが調査の過程でわかりました。仕事着として耐用できなくなった布がボロ織りの材料など他に転用されたこともその理由の一つでしょう。

そこで現時点ででき得る限りの資料収集を行い、県下各地域のさまざまな風土の中で生みだされてきた仕事着を体系づける第一歩として企画されたのがこの展示会です。

下伊那・上伊那・木曾・安曇・西山・長野盆地・北信濃の各地域より特徴的な仕事着を比較展示し、人形を用いた立体的展示と壁面展示の組合せによってより効果的に形態や機能性をみていただくことを心がけました。また仕事着の歴史とその利便性をみていただくため、重要文化財「職人盡絵屏風」や「木曾式伐木運材図会」なども合せて展示しました。

こうした仕事着は上衣では袖の形・衿・総丈の長さなど、下衣の山袴ではマチの形・脇あきなどに地域色をみることができます。その機能性や無駄のない裁断法には庶民の工夫のあとがみられます。



霜月祭の衣装

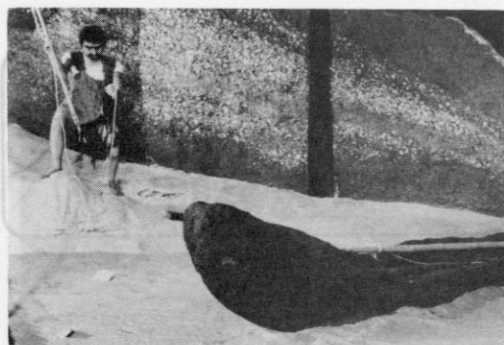


職人盡絵屏風にみる仕事着

第9回特別展

縄文人のくらし

10月7日～11月25日



漁労のようす

これまで、古墳時代の「はにわ」、弥生時代のシナノの様子を順に取り上げ、研究の成果を展示してきました。今回は更にさかのぼり、約8千年にわたる縄文時代の人々の暮らしぶりに焦点をあてて、東日本の資料を中心に考古学研究成果をわかりやすく展示しました。

縄文人は森では木の実などの採集、イノシシなどの狩猟を食糧獲得の手段にしました。また海や河川にも進出して、現在に継承される島国日本の漁労文化の基礎を形づくっています。豊かな森と海を背景としたこのような自然への働きかけと適応により、縄文人は文化や社会のしくみをしだいに作りあげてきたのです。ここに私たちの生活に連綿とつながる生きる智慧をみることができます。

考古部門の展示は現在の生活とあまりにかけはなれ、なじみにくいのか、来館者にはほとんど関心が持たれないのが現状です。従って、前段に

記したように現在の私たちの生活の基盤になったのが縄文時代であるという観点より、民俗的な視点も取り入れて、「縄文時代の民俗」を示し、縄文人のくらしぶりを身近に感じてもらいたいという意図のもとに今回の展示を企画しました。

そのため、難解な時期区分などにはふれず、個々の名称もむずかしい専門用語ではなく、わかりやすいものにしました。展示についても個々の遺物の羅列にならないように、ジオラマなどの立体的展示物を多くし、また想像画も随所に織り込んで縄文時代像を描くべく配慮しました。

来館者が自然に縄文の世界にひたり、驚きと感動をもって、現代の生活との接点を探っていたくることができましたならば、今回の新しい試みを次回の展示にも生かしていきたいと考えます。

この特別展のため、目でみる図録「縄文人のくらし」を発行、現在も館内で販売しています。



縄文人の道具箱・身なりほか

今秋開館の

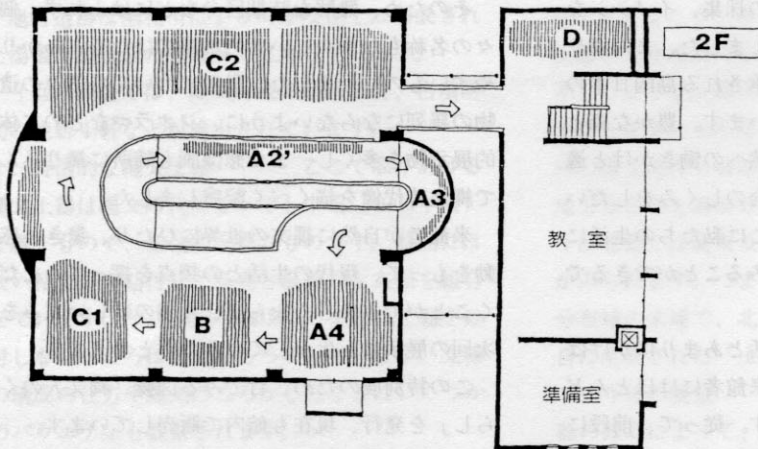
自然史館(仮称)

長野市では、社会教育の場としての博物館づくりを意欲的に進めて来ました。その一つが今回長野市篠ノ井の茶臼山一帯に整備が進んでいる、自然科学関係の施設でした。茶臼山動物園・植物園・恐竜園が完成した一昨年以來、これらの施設を

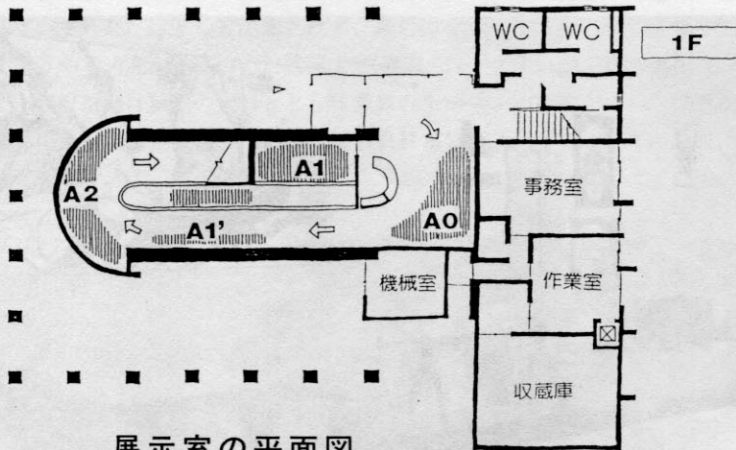
学問的に体系化するための博物館施設が計画・推進されて来ました。

たまたまこの地域一帯が地すべり地域で、むき出しの第三紀の地層からは、当時の植物や動物の様子を今に伝える化石が多く出土し、50年来その研究に当たられた大田繁則氏からは、貴重な資料が当館に寄託されています。

地球上に生物が誕生し、厳しい環境に対応しながら進化を重ねる長い歴史の中から、現在地球上に生棲する生物が生まれて来ました。この様子を分かり易く勉強できる施設として計画したのが、長野市立博物館自然史館で、茶臼山一帯の教育施設のほぼ中央に開設することになりました。



- D 視聴覚コーナー
- C 3 更新世
- C 2 鮮新世
- C 1 中新世
- B 2 化石を知る
- B 1 テーマ展示
- A 3 新生代
- A 2' 中生代から新生代へ



- A 2 中生代
- A 1' 古生代から中生代へ
- A 1 古生代
- A 0 地球の歴史

展示室の平面図

展示場は約300平方メートル、外に視聴覚室・教室なども補助展示場に使います。今回の展示については、その監修・指導を亀井節夫京都大学教授にお願いし、計画を進めています。

おもな展示物としては、古生代の海底に生棲する動・植物の生態を見れる大型ジオラマ、中生代・日本で発掘され、全身骨格が復元されているは虫類としては有名な北海道穂別町博物館所蔵の長頸竜（エラスモサウルス科）、新生代・北海道開拓記念館原型所蔵のナウマン象については、亀井先生の修正により、新資料に基づいた骨格標本が展示できることになっています。

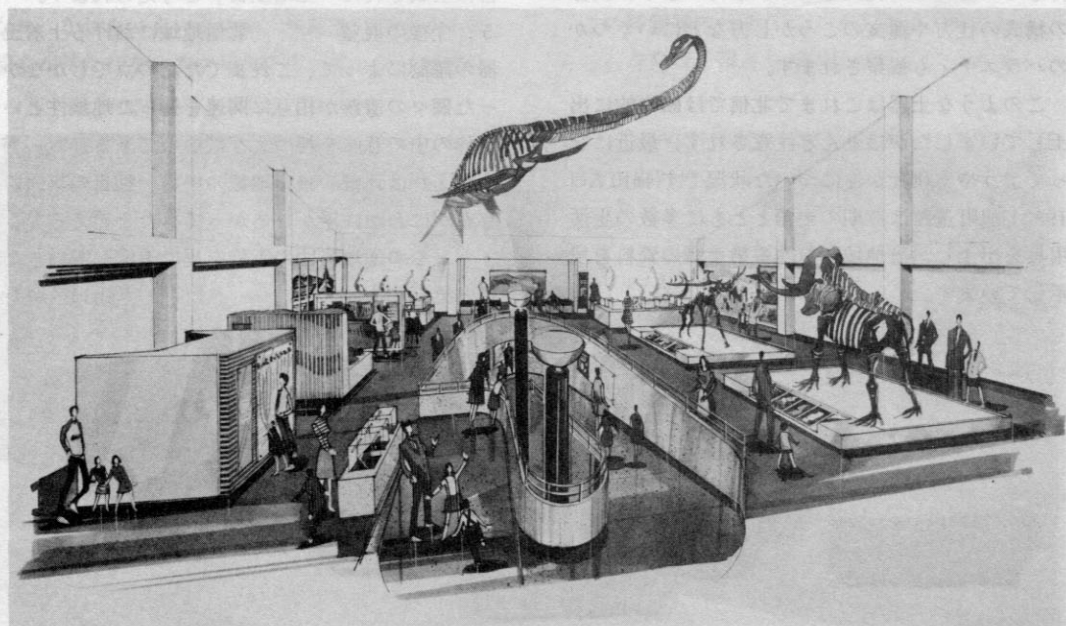
研究室では、茶臼山や近郊で採集できる化石の研究指導のできる体勢をつくり、愛好家のみなさんとともに勉強できる施設となる予定です。



工事が始まった建設地



展示の目玉になるクヒナガリユウ



自然史館2階の完成図

調査研究ノート

■ 考古

旭町遺跡の縄文土器

1. 旭町遺跡 旧県立図書館跡地に建設される長野市立長野図書館の工事に先だち、昭和59年4月から5月にかけて、緊急調査が行われました。調査地は長門町地籍に属していますが、既に旭町遺跡として登録されています。しかしながら、これまで土器などは採集されているものの、正式な調査例がないまま市街化が進んで現在に至っています。

旭町遺跡は裾花川による河岸段丘上に形成された湯福川扇状地の扇端部に立地しています。

今回の調査では、縄文時代の住居2軒、古墳時代の住居4軒などが検出されています。

2. 特徴的な縄文土器 ここでは取りあげる縄文土器は縄文時代のなかでも中頃（4000年前）に属するもので、比較的大形のもので、器面には太い粘土紐を貼付して渦巻と直線的な文様を組合せています(下の展開写真参照)。また粘土紐を貼付しないところは縄文をころがしています。文様の構成の仕方や縄文のころがし方などにいくつかのバラエティも観察されます。

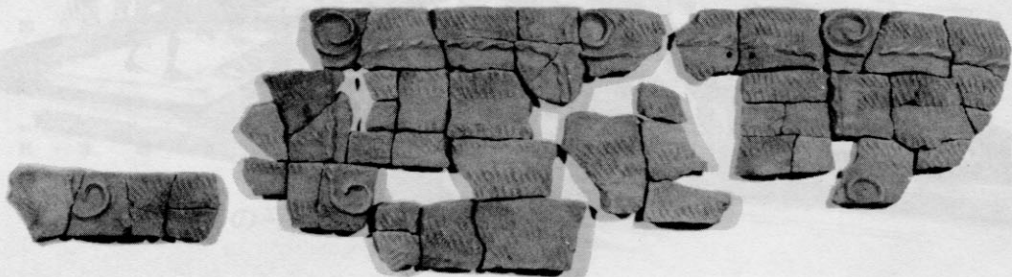
このような土器はこれまで北信では断片的に出土していましたがほとんど注意されず、最近になってようやく研究が途についた状況です(綿田人口1983)。旭町遺跡は該期の土器とともに多数の生活用具を出土し、当地域における第1級の資料を呈示しています。

3. 土器の研究 縄文土器は縄文人にとって、煮炊き・貯蔵など生活に欠かせない道具で、8000年の長い間、日本列島内各地で独自に発達・変遷をとげてきました。

現在でも各地に方言が見られるように、縄文土器にも地域によって特色が認められます。こうした地域色をもつ土器の分布範囲を同一部族の居住地としたり、通婚圏とする考え方もあります。土器の地域色からは地域内の人間集団の密接な関係とともに、地域をこえた広範な交流も想定されます。このように土器は人間集団総体の意識を反映したもので、当時の文化や社会を追究していく上で有力な手がかりになり得るものです。

4. 北信における土着土器 取りあげた土器は千曲川中流域・犀川・裾花川流域に分布していると思われませんが、具体的な様相については不明です。また少し顔つきは異なりますが類似した土器が北陸地方にもみられます。旭町ではここに示したような土器以外に、少量ですが、関東的な土器と東北的な土器と一緒に出土しています。県内の縄文時代中頃の様相をみると中南信には中部地方独自の土器が分布しているのに対し、このように北信には関東及び北陸地方の文化の強い影響がみられます。つまり、これらは関東的な土器の分布域の末端で、北陸地方の影響を受けながら独自に生成された「土着土器」と考えられます。

5. 今後の展望 北信地域における土着土器の確認によって、これまでただの点でしかなかった個々の遺跡が相互に関連を持った地域性という枠の中で意味を持つようになってきました。言いかえれば比較的狭い地域の中で、独自の集団の存在がにわかに浮かびあがってきたと言えるでしょう。この地域集団の実態を更に追究していきたいと思います。(山口 明)



旭町遺跡出土の土器 縄文時代

■ 自然

太陽黒点の観測

● 観測の初め

長野市立博物館が開館した年(1981)の7月31日に部分日食がありました(写真1)。それを写真に記録するために7月の中頃から太陽を試験撮影し始めたところ、太陽面にはたくさんの黒点が見られました(写真2)。しかもサングラスを使えば肉眼でも見えるほど大きな黒点も出ていて、大変興奮しながらスケッチしたのを覚えています。その後数日連続して観測したところ、太陽の自転による黒点の移動だけでなく、黒点自体が大きく成長するものや新たに発生するもの、また消滅していくものと実に変化に富んでいるのが見られました。予測がつかないこの激しい変化は大変興味深く、黒点観測を続けるきっかけになりました。

● 目的

前述のようなことで、実は目的が先にあって観測を始めたわけではありませんが、やはりしっかりした目的を持たないと良い観測にならないということは言うまでもありません。そこで私なりに目的を次のように定めました。

①太陽は地球上に生命を与えている重要な星ですが、かと言って黒点の増減がすぐに地球の気候に影響を与えません。黒点の増減は11年周期といわれていますが、磁場の極性を考えると22年ということになります。太陽活動と密接な関係があるその周期と変化を今後長期的かつ連続的に見守る

必要があります。(黒点観測は短期間ではあまり価値がありません)

②天候等の関係で必ずしも連続的に太陽を監視することは不可能なので、全国の観測者と協力して1ヶ所へデータを報告することによって観測の価値を高めます。(当館の報告先は東亜天文学会)

③太陽活動とは関係ありませんが、観測地特有の天候や大気状況が観測に大きく影響を与えます。そこで長野の気象と観測条件との関係を何とかみたいと思います。

● 今後

観測を始めた頃は極大(1979年)を過ぎたばかりで太陽面がたくさんの黒点でにぎやかだったことが観測の意欲を出させた原因の1つだったと思います。その後はどんどん黒点が減り続け、最近では黒点がない日も結構あり極小期も近いようです。再び黒点が増えてくるのでしょうか、興味深いところです。今後はより正確にそしてできるだけ長く観測し、珍しい“白色光フレア”を1度はこの目で見たいものです。(大蔵 満)

観測法：使用望遠鏡 15cm屈折赤道儀

56倍にて投影 投影像直径19cm

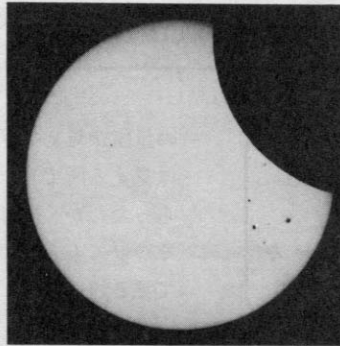


写真1 1981年7月31日12時15分

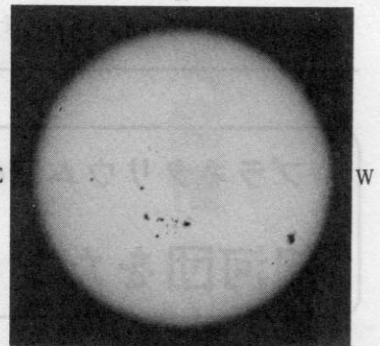


写真2 1981年7月28日11時12分

太陽黒点相対数

太陽の黒点数を客観的に表す方法にウォルフ黒点相対数(=R)があります。

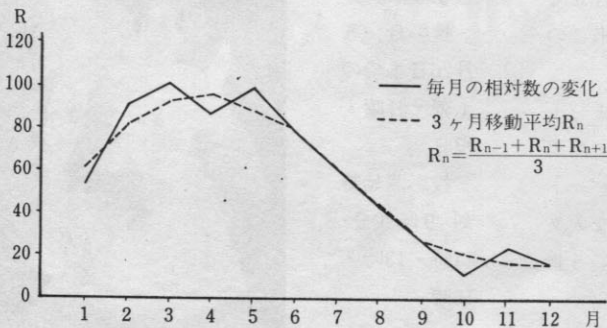
$$R = k(10g + f)$$

k: 観測器機及び観測者による係数

g: 黒点群数

f: 黒点数

左のグラフはk=1としたもの



1984年月別黒点相対数の変化

昭和60年度特別展

善光寺信仰

開催期間 昭和60年4月7日～5月26日

趣旨及び展示 長野市の前身は、善光寺町と言われるように善光寺の門前町として発展してきました。それは庶民信仰として根強い善光寺信仰に支えられたもので、単に善光寺があったからということではかたづけられない点が多々あります。

善光寺信仰は、全国津々浦々まで広がっている特異な信仰で、老若男女・貴賤・宗派をとわない点、また各地に善光寺様式仏・縁起・絵伝等が残されていることに特色があるといえます。

この展示会は、こうした善光寺信仰とは何んだらうかという問いかけに対し、その対象となった、あるいは現在も生き続けている善光寺信仰関係文化財を通して歴史性・地域性を再考してみようとするものです。

展示資料は、重要文化財5点・その他の指定文



無常院（市内小市）の善光寺仏

化財11点を含む、総計約70点を予定しています。内容は、善光寺様式仏、善光寺縁起関係、善光寺とゆかりの人々、善光寺ゆかりの文化財、善光寺と民間信仰、善光寺、善光寺絵画、縁起ジオラマを計画しています。ちなみにこの会期中、善光寺では7年毎の御開帳が行われます。

プラネタリウム春の番組

“銀河団をたずねて”

3月2日から新番組「銀河団をたずねて」が始まりました。当館のプラネタリウムは四季に合わせて3ヶ月ごとに番組が変わりますが、開館以来この春で15作目になります。

さて、今回の番組の内容を少し御紹介しましょう。ある日、小学生のたかし君はおじさんに高妻山の向う側へ連れて行ってもらいました。パードラインを経由して到着した場所には、大きな天文台があり、そのドームの中には直径10mという世界一大きな望遠鏡があるということです。

やがて日が沈むとおとめ座やうしかい座など春

の星座が見えてきます。そこは星がとてもきれいに見える所でした。春の星座をいろいろ教えてもらったたかし君は、いよいよ世界一の望遠鏡をのぞかせてもらうのですが、さて、たかし君が初めて見る遠い宇宙はどんな世界だったのでしょうか。

投影日 5月26日までの土曜・日曜・祝日

投影開始時刻 9時30分・11時・13時・15時



母(おとめ座)と娘(ペルセポネー)